Color Science Association of Japan

日本色彩学会誌
JOURNAL OF THE COLOR SCIENCE ASSOCIATION OF JAPAN
VOLUME 31 NUMBER 1 2007

巻頭言　色は「結果」か「原因」か

東海支部長　高橋　晋也

一昨年の9月、慶應義塾大学で開催された日本心理学会第69回大会の中で、「色彩現象の統一的理解」と題されたシンポジウムが開かれました。日本色彩学会も共催していましたので、参加された学会員の方もいらっしゃるかと思います。表題の「色は結果か原因か」は、その時、私が話題提供させていただいた演題です。

私はもともと知覚心理学の分野で色と関わってきました。具体的には種々の錯視や同化対比現象などです。いうまでもなく知覚される色は光の物理的性質で決まりますが、時間的空間的な文脈（観察条件）による様々な修飾を受けます。私が関わってきた研究は主に後者の問題です。ここでは、同一の光に対する微少な見え方の変化、すなわち「結果としての色」が研究対象となります。原因は光および観察条件であり、知覚経験としての色はその結果なのです。

一方、昨今の色彩ブームの中、世間の耳目を引く問題は、人間の感情や生理状態、あるいは具体的な行動に色が及ぼす（と期待される）様々な効果です。じつはこの問題も長い研究史をもつ伝統的なテーマなのですが、最近では、たとえば青色街灯による路上犯罪の抑止効果、生鮮食品の購買意欲を高める照明条件等々、より現実的・実践的な関心が高まっているようです。ここで関心が向けられるのは「原因としての色」です。知覚された色が原因となり、人間の心理・生理・行動に様々な結果を生じさせるという枠組みで捉えられます。やや話が逸れますが、世間における色彩心理学のイメージは圧倒的にこちらの問題です。そのため、私はこれまで、色彩学会内では「心理学者」と名乗ることを控えてきました。

さて、こう考えてくると何やら分からなくなってきます。色は「結果」なのでしょうか。それとも「原因」なのでしょうか。もちろん両方の面があることに違いありませんが、一般には、上に述べた二つの研究領域のいずれもが心理学の守備範囲に入ります。つまり、心理学において、色は、ある時は結果、ある時は原因というように、とても多義的に扱われているわけです。このように位置づけが曖昧な研究対象は他に例を見ません。そして、この多義的な位置づけこそが心理学の研究対象としての色の面白さだと思うのですが、残念なことに、「結果としての色」の研究と「原因としての色」の研究はこれまでほとんど交流がありませんでした。互いに知らん振りです。これでは色の面白さが少しも生かされません。

慶應の鈴木恒男先生から冒頭のシンポジウムのことを打診されたとき、タイトルに掲げられた「統一的理解」というテーマを私なりに考えました。色を統一的に理解するとはどういうことなのか。暫定的にたどり着いた結論が、上に述べた二つの色彩心理学の融合ということでした。「結果としての色」研究と「原因としての色」研究を同じ枠組みで統一する。まったく途方もない構想で、実現に向けての具体的なビジョンもありませんが、まずは一人の人間が両方のテーマを扱ってみることからと思い、ここ数年、色照明や色嗜好の研究をぼちぼちと始めています。研究の成果はまだまだこれからですが、学会内で「色彩心理学者」を名乗ることに抵抗を感じなくなってきたことは目に見える成果のようです。

（名古屋大学）

NII-Electronic Library Service